



infoteria VISION



2007 BUSINESS REPORT

中間事業報告書

「つなぐ」を基本に、IT分野におけるモノづくり企業として

インフォテリア株式会社は、「つなぐ」を製品開発のテーマに、IT分野におけるモノづくり企業として、地に足のついた活動で付加価値の高い商品開発を行っています。主力製品の「ASTERIA (アステリア)」を軸に、ソフトウェアのモノづくり企業として、日本発の世界に通用する製品開発を目指しています。

インフォテリア株式会社 代表取締役社長/CEO 平野洋一郎

「infoteria VISION」を通じて、株主の皆様との末永いお付き合いを

株主の皆様には日頃よりご支援いただき、心より感謝申し上げます。本年6月22日、東証マザーズに株式上場を果たすことができ、本日初めての事業報告書として、この小冊子「infoteria VISION」を株主の皆様にお届けいたします。弊社に関するさまざまな情報や私どもの想いをこの冊子を通じてお伝えしていき、一人ひとりの株主の皆様へ、より末永くご支援をいただければと願っております。

しかしながら、今回、上場後初の事業報告にもかかわらず、業績の下方修正を余儀なくされ、株主の皆様にはたいへん申し訳なく、厳しく襟を正す思いでございます。これは、当初予想していた大口案件の受注が計画どおりに進まなかったことに起因しています。

当社は、「特定顧客からの受注→開発」という受託開発型ではなく、「開発→不特定多数に販売」というパッケージ開発型のビジネスモデルのため、売り上げ予測の難しい面はありますが、今後は販売にお

けるパートナー制度をより一層整備することで、売り上げの予測精度を高め、皆様のご期待に添えてまいります。

世の中の流れを見据えて、世界に通用するソフトウェア製品を目指す

私たちは、「世界に通用する製品を開発。パートナーがその製品を活用してお客様の個別のニーズに柔軟かつ迅速に答えるシステム提供を行う」という形で、ビジネスを展開してきました。

製品を開発する際、重要なのは「数年先に必要となるもの」を考えて、それを具体的な形にしておくことです。そして、もうひとつ重要なのが世の中の流れです。

20世紀は「規律・統制・階層」を核とする価値観の世の中といわれていましたが、21世紀は「自律・分散・協調」が基調となると考えています。そうした中で、エコロジーや共生という考え方が注目され、ビジネスの現場でも、小さな専門的集団が必要に応じ



インフォテリアの製品ロードマップ

利用者の増加

つながっていくことが当たり前となっていきます。

それが「自律・分散・協調」の考え方であり、これからの社会を支えていくソフトウェアをつくる私たちの原点でもあります。コーポレートカラーの「グリーン」も、そうした想いに基づいて、エコロジーや共生という考え方を意識して定めています。

ビジネスを支える無数のシステムを継ぎ目なく「つなぐ」ソフトウェアを開発

当社の売上高の9割を占める主力製品の「ASTERIA」は「星座」を意味するギリシャ語です。星座は星と星をつないで、新しい形をつくります。それと同様に、「ASTERIA」は一つひとつのビジネスを星になぞらえ、それを支えている無数の異なるシ

システム間を「つなぐ」ことで、新しい形、新しい価値を生み出す製品群です。

「ASTERIA」の大きな特長は、プログラムを「書かないで＝ノン・コーディングで」つなぐことにあります。従来のシステム開発では、数万行にも及ぶプログラムを「書く」のが当たり前でした。この方法は、システムを長い間使い続けるのであれば問題はありません。しかし、企業のビジネスプロセスの革新やM&Aなどによる企業間でのシステムの更改や統廃合が頻繁な昨今では、時間とコストをかけてプログラムを「書き換えて」いたのでは変化のスピードに対応できません。

「ASTERIA」では「書き換えをゼロにする」という考え方のもと、必要なフローチャートを描けば、そのままプログラムが動くようにしています。その結果、開発したエンジニアだけでなく、誰が見ても一目瞭然

でシステム構成や変更点がわかり、必要なときに「迅速にシステムをつなぎ、またつなぎ変えること」ができるのです。

真に使う人の視点で企画・開発し、誰でも直感的に使えるソフトウェアを迅速に開発

一口に「システムをつなごう」としても、現状ではハードメーカーの違いやアプリケーションの互換性がなく、そのままつなぐことはできません。そこで、異なるシステムが連携できるようにするための共通言語として用いられるのが「XML」という技術です。

私たちは、業界でその可能性に疑問符が投げかけられていた時期から、いち早くXMLに着目してソフトウェア開発を進め、2002年6月に「ASTERIA」

を発売。「XMLを土台に既存システムをつなぐ開発や変更が容易に行えるユニークなソフトウェア」として、現在では400社を超える企業で採用されています。

私たちは、コンピュータを動かす基本のオペレーション・ソフトウェアと業務処理を実行するアプリケーション・ソフトウェアの間でさまざまな機能を提供する「ミドルウェア」分野で製品を開発していますが、残念ながら日本で使われているミドルウェアの大半は外資系ソフトウェア会社の製品です。その原因は、日本のソフトウェア会社の技術力は極めて高いにもかかわらず、「自ら考えて製品を企画・開発し、役に立つソフトを提供し、多くの人に喜んでほしい」という取り組みが弱いからだと感じています。

IT分野におけるモノづくり企業として世界に貢献するソフトウェア製品を提供

「ASTERIA」は企業向けミドルウェアであり、私たちの製品導入先は大手企業のお客様から始まりましたが、中堅・中小規模のお客様にまで利用していたきたいと考えています。そのために、かゆいところに手が届くような、細かな部分にまで配慮した製品を開発・提供しています。今までのソフトウェア市場は

成長過程でしたから、「どんな機能があるか」が差異化のポイントでした。

しかし、市場が成熟しつつある中で、機能は当たり前になり、品質や操作感などの機能を越えた部分が差異化のポイントになります。そうすると、家電製品や自動車のように、日本企業の出番となるはずですが。日本の技術者は細かな工夫やより高い完成度を実現することに長けており、ソフトウェア分野でも、それが競争力になります。私たちも、その一翼を担うことで、世界に貢献する製品を提供していきたいと考えています。

IT企業というと、あらゆる業種やサービスなどが一括りにされがちですが、私たちは「モノづくり企業」を自負しています。ソフトウェア製品を企画・開発・販売するソフトウェア分野における製造業として、地に足のついた活動で価値を提供していきます。そして、世界に羽ばたいた日本の製造業のDNAを受け継ぎ、お客様が単なる満足ではなく、それを越えた感動を得られるような完成度の高いモノづくりに邁進していきます。

IT用語解説

XML (eXtensible Markup Language)

XMLは、インターネット上で扱うデータを記述するための世界標準技術。1998年にW3Cが制定。データ中に意味を持たせることにより、人間だけでなくコンピュータも意味を理解することで、異なるシステム間でのデータのやり取りが可能になる。特定のベンダーや特定のソフトウェアに依存しない、オープンで人も読めるテキストベースのデータ形式であり、既存のインターネット技術が使用できるという特徴があり、異なるシステムをつなぐことができる。

使う人が直感的に使える操作感を目指して

インフォテリアの製品開発の目標は、世界に通用するソフトウェアを開発することです。使う人の感覚や想像力だけでも使える、操作感に優れたソフトウェアを開発し、誰もが気軽に使えるようにすることで、差異化を図っています。

インフォテリア株式会社 取締役副社長 / CTO 北原淑行

世界に通用するソフトウェア開発のカギは 誰にもわかりやすく気軽に使える操作感

私たちの製品開発の目標は、世界に通用するソフトウェアをつくることです。年齢、性別、国籍を問わず、どんな人にも簡単に使えなければ、世界中の人に使ってもらえません。ソフトウェア製品は、そのソフトウェアが持つ「機能」だけで良し悪しを語られることが多いのですが、私たちが特に重視しているのは「操作感」です。

例えば当社の主力製品「ASTERIA」では、大きく分けてふたつの操作場面があります。ひとつは、異なるシステム間をつなぐための「開発段階」。そしてもうひとつは、システムをつないだ後で日々問題なく動かすための「運用段階」です。

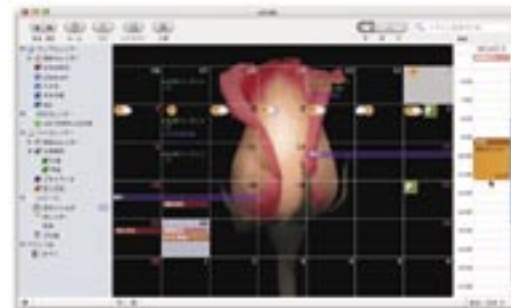
まず、開発段階では、異なるシステム同士をつなぐための操作が必要となります。この段階ではシステム同士を接続するための手順や、データの形式を相互に使えるように変換するための設定が行われます。また、運用段階では、システム同士の接続状況の確認や、データの送受信記録の収集などの操作が必要となります。

このふたつの場面において、単に「機能があれば良い」のではなく、使う人が「直感的に使えるか」、「間違いなく操作できるか」ということが、実はソフトウェアの能力と評価に大きな影響を及ぼすのです。「必要な機能を探すのに手間取った」とか、「操作を間違っただけなのに、その修復に長い時間を要した」という無駄が発生するようでは、そのソフトウェアは高い評価を得ることはできません。

ですから、私たちはソフトウェアの操作感にこだわり、すべての製品で、画面上の機能の構成からアイコンのデザインの一つひとつに至るまで、徹底的にチェックしています。

残念ながら、企業向けのソフトウェアにおいては、欧米のソフトウェアに比べて日本のものは操作感へのこだわりが少ないようです。「機能の豊富さ」では欧米のものに勝っているにもかかわらず、操作画面を一見ただけで、その逆の優劣を感じさせてしまうことは珍しくありません。

世界に通用するソフトウェアにするためには、「機能の豊富さ」だけではなく、心地よい操作感を提供する「ソフトウェアデザイン」が不可欠です。



使う人の感覚や想像力で誰でも簡単に操作できるように開発している（左：「c2talk」画面例、右：「OnSheet」画面例）

マニュアルに頼らず、使う人が機能を 「自然に発見して使える」ソフトウェア

かつてのようにコンピュータを一部の人がだけ使っていた時代には、ソフトウェアには充実したマニュアルが用意され、操作がわからないときは、マニュアルを参照しながら使っていました。しかし最近では、誰もが使い慣れた Web ブラウザの画面から、インターネットを閲覧する操作感覚で動かせるソフトウェアが増えてきて、使う人は画面の印象だけで操作するようになっています。

ですから、分厚い操作マニュアルがあるのではなく、「ここを押せば、こんなことが起こるだろう」とイメージでき、フィーリングで使えるような画面やボタン操作が求められます。また、かつては内容を勉強してか

らソフトウェアを使っていたが、最近では、使いながら機能を覚えるのが当たり前になってきています。

ソフトウェアには非常に多くの機能が備わっており、勉強しながら操作を覚える方法では、せっかくの有用な機能が埋もれたままで、ほんの一部の機能しか使われません。そこで、フィーリングで操作だけでなく、表には出てこない機能を使う人が自然に発見して使えるような仕組みの研究も進めています。

このように、機能だけでなく操作感を追求したソフトウェアをつくり上げていく。それが私たちのソフトウェア開発の基本姿勢です。世界中の人々が心地よく使えるソフトウェアデザインを備えた製品を開発し、世界中にその価値を提供していきたいと考えています。

TOPICS & GROUP

2007年6月22日 東京証券取引所マザーズに上場

弊社は2007年6月22日、東京証券取引所マザーズに株式を上場させていただきました。1998年9月、日本で初めてXML専門のソフトウェア開発をスタートしてからほぼ9年、マザーズへの上場を果たすことができました。これもひとえに株主の皆様やお客様をはじめ、多くの皆様の温かいご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

上場を機会に、世界に通用するソフトウェア開発に一層磨きをかけ、お客様の価値向上に貢献できるよう、たゆまぬ努力を続けます。これからも、皆様からの期待に応えられる企業として、誠心誠意取り組んでまいります。

2007年12月4日/11日 MDM サミット2007を開催

ビジネスに不可欠なマスタデータ管理を実現する新製品発表イベントを東京(2007年12月4日)と大阪(12月11日)で開催。マスタデータ管理(MDM: Master Data Management)とは、各種企業向けパッケージソフトウェアの普及により多重に存在することになった顧客情報、社員情報、製品情報などのマスタデータを一元的に管理することで企業の経営品質向上に役立つものです。

顧客データの重複が引き起こすCSの低下、社員情報の多重管理によるオペレーティングコスト増、類似する複数のマスタデータの存在による情報漏洩対策コスト上昇など、さまざまなリスクを孕む企業システムの現状をマスタデータ管理システムは一気に解決します。インフォテリアの企業データ連携(EAI)市場No.1の実績を活かした、マスタデータ連携パッケージ製品の全貌を紹介します。

2007年6月20日~24日 インセンティブツアーを実施

2007年度インセンティブキャンペーン(2006年10月~2007年3月)で、優秀な成績を収めたパートナー10名様をご招待するインセンティブツアーを実施。2007年6月20日(水)~24日(日)の日程で、米国サンフランシスコ地区におけるシリコンバレー視察と市内観光を行いました。

第1日目はサンフランシスコ市内観光、2日目はインフォテリアUSA、リアルネットワークス(インターネットメディアデリバリーソフトウェアおよびサービスの提供企業)とシックス・アパート(ブログホスティングサービスの開発を行っている企業)などを訪ね、最先端のソフトウェアの動向を視察しました。



リアルネットワークス訪問

2007年7月12日 「@warp 1st GiG」を東京国際フォーラムで開催

2007年7月12日(木)、「@warp 1st GiG」を開催しました。「@warp 1st GiG」のテーマは、「つながる」がコンセプトの「@WARP」を提供する弊社ならではの、あらゆる「つながる」から新しい「カタチ」を創造すること。基調講演では、経済ジャーナリスト財部誠一氏が「世界とつながるグローバルセンスの時代」について、そして電気通信大学 知能機械工学科の稲見昌彦教授が「情報世界と現実世界を『つなぐ』ためのテクノロジー」を講演。その後、パートナー様15社による自社の製品やソリューションを紹介するセミナーを開催。そして、トリを飾るのは「トワイライト GiG」です。弊社代表取締役社長/CEOの平野洋一郎をモデレーターに、日本オラクル株式会社代表取締役社長/CEO 新宅正明氏と、株式会社ワークスアプリケーションズ 代表取締役最高経営責任者 牧野正幸氏を迎えてスタート。米国と日本を代表するエンタープライズソフトウェア・メーカーのトップたちが熱く語るトップ対談となりました。



「トワイライト GiG」トップ対談

@WARP= 「ASTERIA WARP」との相互接続を実現し、各プロダクトの強みを活かした付加価値の高いソリューションが展開できるプロダクトアライアンス。

2007年11月 EAIで2年連続シェアNo.1を獲得

テクノシステムリサーチ社の「2007年ソフトウェアマーケティング総覧」(2007年11月発刊)によると、ASTERIAの出荷本数シェアは2005年度に引き続き2006年度も、EAI製品で国内マーケットシェアの第1位を獲得しました。

2007年10月22日 SaaS 専門の会社を設立

インターネットの普及により、企業では活動に必要なIT資産をすべて所有する形態から、必要なソフトウェアを必要なタイミングで利用するSaaS(サーズ)が注目を集めています。SaaSは、サービスと企業内システムやサービス同士を「つなぐ」、サービスを介して人を「つなぐ」といった新たな需要が生まれ、弊社が培ってきた技術とノウハウが大きな価値となります。そこで弊社ではSaaSを専門とする100%出資子会社「インフォテリア・オンライン株式会社」を10月22日(月)に設立し、SaaS市場におけるリーダーシップたるポジションの確立を目指します。そして、SaaS第1弾として「OnSheet(オンシート)」の提供を同日より開始しました。

Infoteria
Online

IT用語解説

SaaS (software as a Service)

インターネットを通じてソフトウェアを提供する新しい仕組み。従来、ソフトウェアはCD-ROMやインターネットからのダウンロード(転送)で入手し、手元のコンピュータにインストール(設置)していたが、SaaSではソフトウェアをインターネット上に置いたまま、Webブラウザ経由で必要なときだけ使う「サービス」として提供する。

財務ハイライト

■ 中間連結貸借対照表

当中間連結会計期間末
(平成19年9月30日) 単位千円

● 資産の部	
流動資産	1,471,072
固定資産	458,486
有形固定資産	35,731
無形固定資産	242,499
投資その他の資産	180,255
資産合計	1,929,559
● 負債の部	
流動負債	175,686
● 純資産の部	
株主資本	
資本金	735,850
資本剰余金	652,619
利益剰余金	363,355
株主資本合計	1,751,825
評価・換算差額等	2,047
純資産合計	1,753,872
負債純資産合計	1,929,559

■ 中間連結損益計算書

当中間連結会計期間
(自平成19年4月1日 至平成19年9月30日) 単位千円

売上高	382,588
売上原価	121,947
売上総利益	260,641
販売費及び一般管理費	366,614
営業利益又は営業損失(△)	△105,973
営業外収益	2,813
営業外費用	24,974
経常利益又は経常損失(△)	△128,134
特別損失	153
法人税、住民税及び事業税	3,230
法人税等調整額	45,143
中間(当期)純利益又は中間純損失(△)	△176,661

■ 大株主(上位10名)

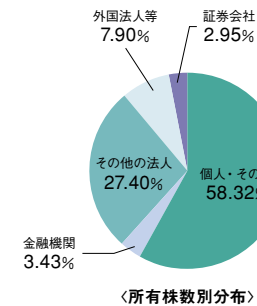
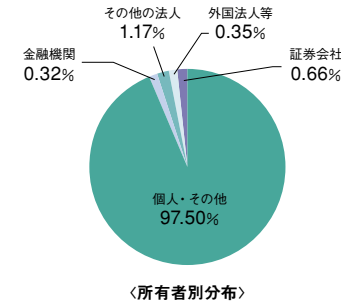
株主名	持株数	株主比率(%)
平野 洋一郎	9,790	17.21
松下電工インフォメーションシステムズ株式会社	7,690	13.52
北原 淑行	4,516	7.94
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー	2,700	4.75
日本テクノロジーベンチャーパートナーズアイ番号投資事業有限責任組合	2,400	4.22
日本テクノロジーベンチャーパートナーズアイ番号投資事業有限責任組合	1,260	2.21
古谷 和雄	1,200	2.11
エイチエスピーシー ファンド サービスィズ クライアント アカウント 006	1,168	2.05
菊池 三郎	1,160	2.04
日本テクノロジーベンチャーパートナーズアイ番号投資事業有限責任組合	1,152	2.03

■ 中間連結キャッシュ・フロー計算書

当中間連結会計期間
(自平成19年4月1日 至平成19年9月30日) 単位千円

営業活動によるキャッシュ・フロー	△89,748
投資活動によるキャッシュ・フロー	△70,163
財務活動によるキャッシュ・フロー	368,665
現金及び現金同等物に係る換算差額	599
現金及び現金同等物の増加額	209,352
現金及び現金同等物の期首残高	1,026,308
現金及び現金同等物の中間期末(期末)残高	1,235,661

■ 株式の状況



■ 中間連結株主資本等変動計算書

当中間連結会計期間
(自平成19年4月1日 至平成19年9月30日) 単位千円

	● 株主資本			
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計
平成19年3月31日残高	539,200	455,969	540,017	1,535,186
株主資本合計				
新株の発行	196,650	196,650		393,300
中間純損失			△176,661	△176,661
株主資本以外の項目の連結会計年度中の変動額(純額)				
中間連結会計期間中の変動額合計	196,650	196,650	△176,661	216,638
平成19年9月30日残高	735,850	652,619	363,355	1,751,825
	● 評価・換算差額等			
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	評価・換算差額等合計	純資産合計
平成19年3月31日残高	—	1,413	1,413	1,536,600
株主資本合計				
新株の発行				393,300
中間純損失				△176,661
株主資本以外の項目の連結会計年度中の変動額(純額)	△117	751	633	633
中間連結会計期間中の変動額合計	△117	751	633	217,272
平成19年9月30日残高	△117	2,164	2,047	1,753,872



■ 会社概要

商号	インフォテリア株式会社/Infoteria Corporation
設立	1998年9月
東京本社	〒140-0014 東京都品川区大井1丁目47番1号 NTビル TEL:03-5718-1250
西日本事業所	〒541-0041 大阪府大阪市中央区北浜3丁目5番22号 オリックス淀屋橋ビル TEL:06-6222-6002
資本金	7億3,585万円
事業内容	XMLを基盤としたソフトウェア製品の開発・販売

■ 株主メモ

証券コード	3853
上場証券取引所	東京証券取引所マザーズ
決算期日	3月31日
定時株主総会	毎年6月
基準日	3月31日
中間配当基準日	9月30日
公告の方法	電子公告 ただし、やむを得ない事由により、 電子公告によることができない場合は、 日本経済新聞に掲載する方法により行います。
株主名簿管理人	大阪市中央区北浜4丁目5番33号 住友信託銀行株式会社
同事務取扱場所	東京都千代田区丸の内1丁目4番4号 住友信託銀行株式会社 証券代行部
同取次所	住友信託銀行株式会社 全国本支店